

高き志【こころざし】

子どもはつまずきの天才

子どもはつまずきの天才である。思いもよらぬつまずきを平気でやってのける。

この言葉は、日本のペスタロッチといわれる教育実践家である東井義雄という方の言葉です。当然のことながらこの言葉には続きがあります。

しかし、子供は、わけもなくつまずいているのではないようである。子供のつまずきの底に、子供をつまずかせる「何か」があるようである。

東井先生は、その「何か」にこだわり、その「何か」を取り除くのではなく、その「何か」を予測して、「何か」につまずいたときに、そこから学ぶことを大切にされた方です。

私は出張等がない限り毎日行っていることがあります。それは、全部の教室を回り授業の様子を見ることです。長い時間教室に留まるのではなく、短い時間ではありますが、毎日継続して見て回るので。私にとっては、子どもたちの頑張りや日々の成長を感じることができる楽しい時間になっています。

以前勤務した学校でのことです。一日の見回りの中で次のような場面が連続してあり、とても印象に残っているので紹介します。

3年生教室(算数【口を使った式】) 発表したある子供の考え方に対して「分かりました。」という多くの子供たちの返事がありました。ところがしばらくして、ある子供が「先生、どうしてそうなるのかわかりません。」と発言したのです。しかも、私の目にはもう一人納得できていない子の姿がありました。担任は、再度説明してくれる別の子供の挙手を求め、その子が少し表現を変えて説明をしました。すると「分からない」と発言した子が「ああ、そういうことか。」と大きな声で納得したのです。後で担任に聞いたところでは、もう一人の子も「納得できた」と答えたそうです。一人の子供のつまずきが、多くの子供たちの確実な学びにつながった場面といえるでしょう。

2年生教室(算数【繰り下がりのある引き算】) 前日、算数の授業を見たときに練習問題でつまずき、答えを間違えていた子がいました。その子の様子を心配していたのですが、なんとこの日はニコニコして授業に参加しているのです。練習問題を見てみると、見事に全問正解なのです。担任は子供たちのつまずきを予測しており、そのつまずきに対応する手立てを準備していたのです。その子は、その手立てにより自力で課題を解決できていたのです。前日のつまずきを、学びに変えた手立てにより、子供たちの満面の笑顔がうまれていたのです。

4年生教室(算数【二桁の余りが出る割り算】) 練習問題で、「二桁の余りの数」がまだ「割る数」より大きいというつまずきをしている子がいました。そのまま次の問題に移ったようでしたので、これは復習が必要だなと思いつつ教室を出ました。しかし、その後職員室で担任から聞いた言葉に私は感動さえ覚えました。「校長先生、〇〇さんは間違っていたのではないんです。あの筆算の横にもう一度同じ筆算をして正しい答えを出していたのです。」詳しく聞くと、一度目の筆算が間違っていたことには気付いたそうですが、それを消してしまうと、どこを間違えたのかわからなくなるので、そのままにして、横に正しい筆算をしたのだそうです。間違えたまま次の問題に移ったのではなかったのです。この子は、自分の力でつまずきを学びに変えることができていたのです。

冒頭の東井先生の言葉には、まだ続きがあります。

3と3は6だということを、感動をもって分らせる授業をしようと思ったら、3と3は5だとつまずく子供を大切にすることだ。授業は「つまずいている子」の目玉が光ってくるようなものでないと「つまずいていない子」にとってもたいくつなものだ。

私達教師は、いつもこのような思いを大切に授業を作っていきたいと思っています。